

J.ケアリノホモク(Kealiinohomoku)のTheory and Methods for an Anthropological Studyをめぐって

遠藤保子

〇はじめに

前回の学会では、ナイジェリアを中心に舞踊人類学の動向をさぐったが、今回はJ.ケアリノホモクの学位論文Theory and Methods for an Anthropological Study (1976 Indiana大学)をめぐり、しかも舞踊人類学研究の方法にテーマをしばって話しをすすめたい。

〇舞踊人類学研究の方法

1) 研究機材と研究展開のプロセスとして、

1.1 機材 (データ収集)	モーションピクチャーカメラ, スチールカメラ, ビデオテー プ, フィルム, エレクトロニ ックシオグラム
1.2 チェックリ スト (データ整理)	ノーティションシステム 音楽分析

2) 全体的アプローチとして、行動人類学とバイオリズム及びその相互作用という二点が論じられている。それはつまり、人間の行動としての舞踊は、生物学的心理学的フレームの中で、しかも文化的に変化するものとして研究されなければならない、人間の行動を決定するのは、バイオリズムが最も重要な要因となるからである。

3) 比較アプローチとしては

3.1 共時的比較	3.1.1 文化内比較
	3.1.2 通文化的比較
3.2 通時的比較	歴史的時間と空間

これらの比較においては、舞踊、ジェスチャー、音楽、言葉という四点にしばって、それぞれの共通点と相異点を明らかにしようとして試みている。例えば、音楽と言葉は聴覚的であり、舞踊とジェスチャーは視覚的である。また、ジェスチャーと言葉はディノティティブであるのに対し、舞踊と音楽はコノティティブである。そして舞踊と音楽をみても、共通点としてメーター、リズム、テンポ、相異点として、レンジ、モード、キーがある。というように、分節化、編成等様にな角度から比較を行ない、舞踊の特性を浮きばりにしよ

うとしている。

4) 経験的方法としては、研究者は踊り手が認識している世界の一部を情報化し、Must — Should — Could — Would モデルを作成する。

ケアリノホモクは、以上のように舞踊人類学の方法を展開している。特に評価できるのは、舞踊と深くかかわっている音楽・言語・ジェスチャーを細部にわたって比較、検討している点であろう。とはいっても、舞踊を研究するには、音楽・言語・ジェスチャー等は重要な要素であるとは多くの人々が述べていることで、めあたらしいことではない。それにもかかわらず、ケアリノホモクが行なったような検討は、これまでにないことでありその意味で注目される論文である。

〇おわりに

ケアリノホモクの論文は、上述した点は評価できるものの、今日的には、音楽や舞踊はオーディオビジュアル的なものとしてとらえられる傾向にあり、単純に聴覚的や視覚的と割り切って考えるには疑問がある。また、舞踊の分節化をとりあげてみると、これまではコマ数に応じて、もしくは一定時間毎に区切って舞踊の動作分析をすることが多かった。しかし、調査地域の人々がどのような動作をひとまとまりの単位と考えているのかをみないでやみくもに機械的に舞踊動作の分節化をするのは、無意味な作業に陥る危険がある。その危険をなくすためには、調査地域の人々の練習を観察し、ひとまとまりの動作をみきわめることも必要であろう。なぜなら、練習をする時は、あるまとまりのところでは区切り、また次のまとまりへと進んでいくことが考えられるからである。そのまとまりをもとに分節化を試み、ひいては舞踊動作の構造を論ずることが可能になると思われる。

以上のように、ケアリノホモクの方法をめぐって、今日の問題点、疑問点を挙げつつ舞踊人類学の方法について考察した。

- * 1 J. Kealiinohomoku, Theory and Methods for an Anthropological Study (Ph.D. 1976. Indiana University) 論文審査員はA. メリアム教授である。
- * 2 チェックリストは5W1Hを基本的質問として舞踊を時間的空間的なレベルでチェックしようとするもの。
- * 3 ラバンのラバノーティション ローマックスのコレオメトリックスの他、ケアリノホモクの修士論文で用いたグリフノーティション等がある。
- * 4 この他にハーモニーと相互作用 時空間における連続と不連続、音楽と舞踊におけるインターバルのある連続、フィールドでの記録問題等がある。
- * 5 次のような質問を考えることである。それについて何をしたか、何をなしたか、その中で何をしたか、そのために何をしたか、そのために何がおこったか等々。